

## 児童の抑うつと家族雰囲気について

— 動的家族描画法を指標として —

北本 桜香・宮本 邦雄

### 問題と目的

先の研究において(北本・宮本、2003)、児童の抑うつに影響する要因について、環境因の一つである家族関係に焦点を当て、児童とその親を対象に質問紙調査を行なった。家族雰囲気の測定には FAI (Family Assessment Inventory)、児童の抑うつ尺度については CDI (Children's Depression Inventory) を用いた。また、それらと親の IWM (Internal Working Models) の関連について検討した。

その結果、児童の抑うつは児童が抱く家族雰囲気と関連があることがわかった。しかし、親の IWM の特徴が児童の抑うつ感および FAI に及ぼす影響については、親の家族雰囲気を介してのみ影響するという間接的な影響のみが支持され、IWM の直接的な影響については明白ではなかった。そこで、FAI の各項目群の得点から予測される家族の状態像が、その得点を持つ家族の現実の状態像と一致するかどうかを検討する必要があると考えられる。

家族雰囲気を示す、FAI の各次元の得点において、家族成員の誰か 1 人だけ逸脱した得点を示しているとすれば、家族の機能状態についての認識が家族成員間で共有されておらず、成員間にずれが生じることになる。これは、家族の問題に 1 人で立ち向かう場合や、1 人で抱え込んでしまう場合に生じやすいと考えられる。一方、複数の家族成員間で平均値から逸脱した数値が見られる場合は、その次元の問題が家族成員間で共有されていると考えられるので、その問題がある程度は意識化され顕在されている状態だと言えるだろう。どちらの場合においても、家族成員間で生じる FAI の得点差というのは、家族の問題意識について重要な知見となるといえよう。

動的家族描画法(Kinetic Family Drawing; KFD) は、投影法のなかでも描画法に属し、描画者自身が捉えた親や同胞の姿、家庭での自己位置など、主観的情緒理解という認知の結果として、家族像が描写されると考えられている。特に、小学校段階の児童では、言語よりも行動を媒介としたコミュニケーションを図る傾向が強いため、問題を抱えた児童の内面を理解するために、KFD が心理治療的指導を行なう上で有効であると考えられる(植村、1989)。また、KFD では、「自分を含めて何かしているところ」という動的要素が加わることで、描画者自身の力動的家族認知を知ることが可能となるといえる(加藤、1988)。以上のことから、KFD を実施することにより、児童の抱く家族イメージを理解することが可能といえる。

そこで、本研究では先の研究の質問紙調査結果と併せて、KFD を指標として、児童の抑うつと家族雰囲気との関連を検討する。次に、筆者が小学校において実際に相談にかかわった児童の FAI の結果と KFD との関連について、個別的分析という視点から、児童の問題傾向との関連を検討していく。

### 1. FAI、CDI と KFD との関連

#### 方法

##### 調査対象

先の研究において質問紙調査を行なった児童のうち、小学 4 年生から 6 年生の児童 405 名(男子 220 名、女子 185 名)を調査対象とした。調査は、学級単位の集団法により実施され、家族描画は、質問紙調査の後に行なわれた。

##### 調査内容

KFD は、A 4 版画用紙に鉛筆で、「あなたを含めた家族が、何かしているところを描いて下

さい」という教示により描画を求めた。

### 分析方法

KFD 分析においては、心理学専攻の3名の評定者による、KFDの描画特徴(9項目)、描画スタイル(7項目)に加えて、個々の人物像の高さ、描画順序、他の人物像から自分の像までの距離に基づき基礎データを求めた。その後、KFDの各側面について群間比較を行なうための大分類として、FAIおよびCDI両尺度の平均得点の低い方から順に、それぞれ高群、中群、低群に分類した。そして3群間でのKFDの特徴の比較を行なうために、 $\chi^2$ 検定を行なった。

## 結果

### 1) 全体的分析

描画の形式分析を行なったところ、最初に自分を描くものが約半数を占め(46.8%)、母親を描くものが32.2%、父親を描くものが25.8%であった。さらに、描画スタイルを見てみると、大半が包囲を描いており(47.7%)、次いでエッジング(37.2%)、一般的な描画スタイル(23.7%)、区分化(18.6%)の順となった。折った区分化や上部に線を描くことは少なかった。また、人物像の特徴では、伸ばしてある腕は自分、父、母ともに70%以上に描かれており、身体部分の省略は自分(56.4%)、母親(53.9%)、父親(52.5%)であった。一方、高く上げた人物像や人物像の省略は3者ともに比較的少なかった。自分と相手との距離については、母親の場合では自己との距離が50mmから100mmが多く(37.4%)、父親では100mmから150mmが多く見られた(33.3%)。

### 2) FAI「家族評価・凝集性」による群間比較

最初に描画様式の出現頻度について、 $\chi^2$ 検定によってFAI「家族評価・凝集性」得点の低い方から順に低群(87名)、中群(87名)、高群(92名)の3群間の比較を行なった。その結果、人物像の描画順序において群間で有意傾向が見られた( $\chi^2 = 15.89$ ,  $df = 8$ ,  $p < .10$ )。すなわち、父親の描画順序では、高群は4番目に多く描くことが多いが、中群では少なかった。

た。さらに、人物像の特徴について同様に群間比較を行なった。伸ばしてある腕、高く上げた人物像、消しているもの、後ろ向きの人物像、ぶら下がっているもの、身体部分の省略、人物像の省略、回転した人物像という特徴のなかで、消しているものみに有意差が認められ( $\chi^2 = 8.60$ ,  $df = 2$ ,  $p < .05$ )、母親を消すという行為は低群が高群よりも多く見られた。

人物像の高さでは、自己を20mm以下で描くことが高群よりも低群の方が多く、高群では自己を60mmから80mmで描くことが多かった( $\chi^2 = 14.64$ ,  $df = 8$ ,  $p < .10$ )。自己と相手との距離では、父親との距離にのみ有意差が認められた。すなわち、高群は父親との距離が長く、低群の方が距離が短かった( $\chi^2 = 19.80$ ,  $df = 8$ ,  $p < .05$ )。

なお、描画スタイルである区分化、エッジング、包囲、折った区分化、底辺に線を描く、上部に線を引く、個々の人物像に線を引くなどは、今回の調査では、有意差は認められなかった。

### 3) FAI「家族組織の柔軟性の欠如」による群間比較

FAI「家族組織の柔軟性の欠如」得点の低いほうから順に、低群(93名)、中群(105名)、高群(110名)に分類し、群間比較を行なった。人物像の特徴のなかで、消しているものみに有意差が見られた。すなわち、自己を消すという行為は、中群のほうが高群よりも多く見られた( $\chi^2 = 7.76$ ,  $df = 2$ ,  $p < .05$ )。また同様に、母親を消すという行為では中群のほうが高群よりも多く認められた( $\chi^2 = 8.43$ ,  $df = 2$ ,  $p < .05$ )。

次に人物像の高さでは、自分、父親、母親において有意差が認められた。すなわち、自己像の高さでは高群の方が大きく描き、低群は小さく描いた( $\chi^2 = 21.54$ ,  $df = 10$ ,  $p < .05$ )。父親の高さでは低群のほうが中群・高群よりも父親の像を小さく描いた( $\chi^2 = 20.97$ ,  $df = 10$ ,  $p < .05$ )。母親の高さでは、高群は母親像を小さく描き、反対に低群では母親像を大きく描いた( $\chi^2 = 22.30$ ,  $df = 10$ ,  $p < .05$ )。

また、描画スタイルのなかで、区分化とエッジングにおいて有意差が認められた。すなわち、区分化は低群よりも中群に多く見られた( $\chi^2 = 8.00$ ,  $df = 2$ ,  $p < .05$ )。またエッジングは中群よりも低群に多く認められた( $\chi^2 = 7.65$ ,  $df = 2$ ,  $p < .05$ )。

#### 4) CDI「抑うつ中核」による群間比較

CDI「抑うつ中核」得点の低い方から順に、低群(97名)、中群(98名)、高群(98名)に分類し $\chi^2$ 検定を行なった。まず描画スタイルの特徴のなかで、区分化のみに有意差が見られ( $\chi^2 = 9.09$ ,  $df = 2$ ,  $p < .05$ )、高群のほうが低群よりも多かった。

また人物像の高さにおいて群間で有意差が見られ、高群は自己を小さく描き( $\chi^2 = 18.11$ ,  $df = 8$ ,  $p < .05$ )、低群は父親像をより大きく描く傾向が認められた( $\chi^2 = 17.73$ ,  $df = 8$ ,  $p < .05$ )。なお描画様式の特徴には有意差が見られなかった。

#### 5) CDI「自己否定」による群間比較

CDI「自己否定」得点に基づき、低群(98名)、中群(98名)、高群(99名)に分類し、群間比較を行なった。その結果、人物像の高さにおいてのみ有意差が見られ、自己像の高さでは、高群は自己像を大きく描く( $\chi^2 = 25.02$ ,  $df = 8$ ,  $p < .05$ )。また父親像の高さでは、高群が低群よりも大きく描く傾向が認められた( $\chi^2 = 18.68$ ,  $df = 8$ ,  $p < .05$ )。なお、区分化など描画スタイル、および人物像の特徴には有意差は認められなかった。

#### 考 察

全体的分析において、FAI「家族評価・凝集性」との関連では、父親を4番目に描くという行為は、家族評価高群に多く見られた。日比(1986)は、人物像の描画順位には、相当に意識的レベルでの問題であり、家族内の日常的序列が的確に反映されていることが多いとしている。また、特に適応上の問題を有していない描画者の多くは、父親像を最初に描くものであると述べている。しかし、今回の調査では家族に

対して肯定感を抱く児童の描画にそのような特徴が見られず、日比(1986)の見解とは一致しなかった。その理由として、父親不在といわれるように、一般の家庭において父親の存在自体が薄れてきているという時代背景が考えられよう。

次に、人物の消去では、母親を消す行為は、家族評価低群、家族組織の柔軟性欠如中群に多く見られ、自己を消す行為は、家族組織の柔軟性の欠如高群に多く見られた。加藤・伊倉・久保(1975)は、家族を消すという行為は、何らかの葛藤の現われであると述べていることから、家族評価が低い児童では、母親に対してネガティブな感情を抱く傾向があるといえよう。西出・夏野(1997)の報告にも、母親が一人よがり的に家族を肯定的に評価している家庭では、その子どもの家族に対する評価は低いことが示されていることからこれが理解できよう。しかし、CDI「自己否定」、「抑うつ中核」の高低群間に有意な差は認められなかった。その理由として、抑うつ感自体が個人の精神的なものによるため、その因果関係をKFDの描画特徴からは読み取ることが難しいと考えられる。

描画様式において、家族組織の柔軟性の欠如低群に区分化、エッジングが認められたが、これらの行為は家族成員から孤立しようとする試みという(加藤、2000)、一種の防衛機制が働いていると思われる。また、人物像の高さについては、家族評価低群、抑うつ中核高群では自己像を小さく描く傾向が見られた。日比(1986)によると、描き手の家族成員の関心の度合いが、人物描画の基本的特徴としての相対的な大きさに投影されるという。すなわち自己を小さく描く行為は、貧弱な自己概念を反映しているのかもしれない。自己と相手との距離からは、家族評価高群が父親との距離が長いことが認められた。距離は、人物像間の物理的距離を意味し、一般に描画者との距離が遠い場合、その対象への孤立感や拒絶感などを現すとされている。しかし、今回の調査では家族評価が高い児童の特徴として、父との距離が遠いことが見出されたことから、父親のそういった否定感は少

なくとも薄いと考えられる。すなわち、父親の関与度が低くても家族はうまく機能できるという説を支持するといえよう。反対に父親の存在があまりにも近すぎる場合、それがかえって窮屈さを生じさせるのかもしれない。

## 2. 個別的分析

### 対象者

事例として挙げた児童は、筆者（北本）が相談員をしていた小学校で、1年以上かかわりを持つものと、今回の質問紙調査の自由記述欄に、家族の問題について記載があり、ある程度家族の状況がわかるものを抽出した。個別分析は全部で6ケースである。

### 分析方法

まず、表1-1から表1-2に、北本・宮本(2003)におけるFAI、CDI各次元の得点の平均および標準偏差を示した。数字横の+、-は、+ならば平均値を1標準偏差上回り、-ならば下回することを示す。これらを基準として、事例および自由記述の得られた家族のFAI、CDI得点を比較していく。

表1-1 児童のFAIとCDIの各次元の得点平均と評価偏差(SD) (北本・宮本, 2003)

FAI		CDI	
家族内評価 凝集性	家族組織の 柔軟性欠如	抑うつ中核	自己否定
2.74 (.600)	2.07 (.611)	.35 (.36)	.71 (.36)
P<.05			

表1-2 親のFAIの各次元の平均および標準偏差(SD)

	家族評価・ 凝集性	家族組織 の柔軟性	家族内 ルール
父 親	2.87 (.450)	2.01 (.484)	2.65 (.407)
母 親	2.85 (.540)	-	2.75 (.528)
P<.05			

### 事例1

#### A子(小6)

A子は祖父、祖母、父、母、A子、弟(小5)の6人家族である。両親共働きのため、幼い頃より祖父母に厳しくしつけられたという。学校では、クラスメイトとの喧嘩が絶えない。相談

内容は「友達から仲間はずれにされている」、「みんなが私の悪口をいう」など、クラス内の対人関係についての悩みが多かった。面接のなかで、A子は周りには自分を理解してくれる人がいないと語ることが多かった。

### 総合的分析

KFD(図1)のなかで、家族全員に顔の省略、および包囲が見られ、家族内コミュニケーションは希薄な印象を受ける。また、A子と両親の向きは反対向きであり、何らかの陰性感情を反映しているといえよう。KFDを描く順番では、最初にA子、6番目に父親、母親は最後であり、家族内におけるA子の順位が示唆されており、接触が少ない両親の描写はあとである。祖父像が一番大きく描かれており、家庭での存在の大きさが見てとれる。CDI得点は平均以上であり、慢性的な抑うつ感が存在しておりFAI家族評価は低い(表2-1)。

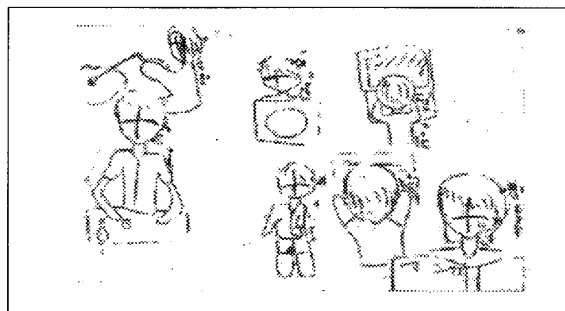


図1 A子のKFD 描画順序 ①自分 ②祖母 ③弟 ④祖父 ⑤父

表2-1 A子のFAIとCDI得点の平均

FAI		CDI	
家族内評価 凝集性	家族組織の 柔軟性欠如	抑うつ中核	自己否定
--1.13	+3.57	+ .71	+1.00
父母の回答は得られなかった。			
P<.05			

### 事例2

#### B子(小6)

B子は、祖父、祖母、叔母、父、母、B子、弟3人、妹の10人家族である。休み時間は本を読んで過ごすことが多く、クラスではおとなしい存在である。昨年、妹が生まれたことにより、弟たちの世話を今まで以上に積極的にして

いるという。こういった事情により親に甘えたいができないと語っていた。

**総合的分析**

KFD (図2) の特徴として、家族全員が区分化されている。これは、家族間の感情的隔離を暗に意味し、家族内の相互的交流の薄さを感じさせよう。それらは、B子のFAIの結果とも一致すると考えられる (表3-1、3-2)。また母親とB子の位置は、向き合っているが、その間には妹とドア様の線でもって別の世界に区別されている。B子にとって、母親からの直接的な愛情充足は難しいことを反映しているようである。

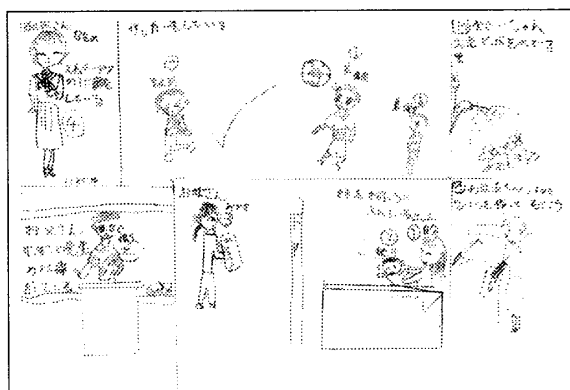


図2 B子のKFD 描画順 ①自分 ②妹 ③母親 ④叔母 ⑤父親 ⑥弟 ⑦弟 ⑧弟 ⑨祖母 ⑩祖父

表3-1 B子のFAIとCDI得点の平均

FAI		CDI	
家族内評価 凝集性	家族組織の 柔軟性欠如	抑うつ中核	自己否定
--1.25	+3.86	++1.43	++1.80

P<.05

表3-2 親のFAIの各次元の平均と標準偏差(SD)

	家族評価・ 凝集性	家族組織 の柔軟性	家族内 ルール
母親	3.00	-	2.75

父親の回答は得られなかった。

P<.05

**事例3**

C子 (小6)

C子は、祖父、祖母、父、母、本人、弟 (小3) の6人家族である。C子の家は、建具屋を営んでおり、仕事が忙しい時は、C子も家の手伝いをしているという。C子の相談の多くは、何となく気が重い、気分がもやもやするなど、だるさや気分の不調など心気症状の訴えが多かった。これは、CDI得点が高いことから理解できる (表4-1)。C子のFAIでは、家族組織の柔軟性欠如得点が高かった (表4-2)。

**総合的分析**

KFD (図3) の特徴は、家族全員の顔面が描かれていないことである。これは、C子の家族への何らかの陰性感情を反映しているのかもしれない。すなわち、弟はゲームをしているところ、弟以外は働いているところを描いているが、これは家族の役割分担を象徴していよう。一家の中心が祖父、父親であり、母親らはその補助的な役割を担っていると考えられる。これは、描画順序から理解できよう。C子のFAI 家族組織の柔軟性欠如得点が高いことより、C子に課せられている役割が、重荷になっている可能性がある。KFDより、母親と祖母は背面を向いているのが気にかかるが、C子と母親は向き合っており、母親との心理的結びつきは強いと考えられる。密着度の強い母親のFAI 家族評価、凝集性の低さは、C子の抑うつ感に影響している可能性がある。

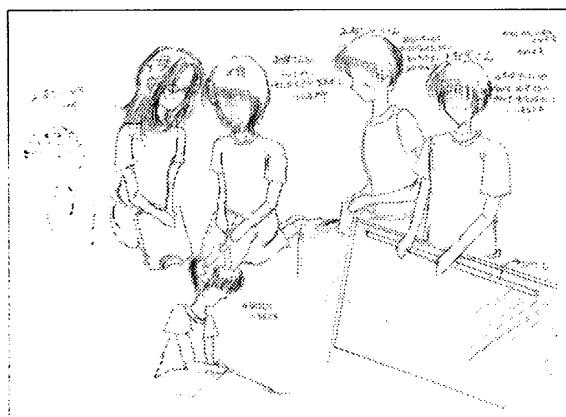


図3 C子のKFD 描画順 ①父親 ②祖父 ③自分 ④母 ⑤弟 ⑥祖母

表4-1 C子のFAIとCDI得点の平均

FAI		CDI	
家族内評価 凝集性	家族組織の 柔軟性欠如	抑うつ中核	自己否定
++2.88	++3.00	++1.57	++.600

P<.05

表4-2 親のFAIの各次元の平均と標準偏差(SD)

	家族評価・ 凝集性	家族組織 の柔軟性	家族内 ルール
父親	2.64	++2.14	-2.33
母親	--2.07	-	2.75

P<.05

事例4

D子は、父親、母親、妹、弟の5人家族である。母親の自由記述は「普段、子どもと接する時間が少なく、気持ちに余裕がない時は子どもを叱りつけてしまいます。子どもが自分と同じ怒り方をしているのを目にすると、同族嫌悪を抱きます」であった。表5-1、2および図4に、D子と親のFAI、CDI得点、KFDを示した。

総合的分析

KFD(図4)には、家族全員に包囲が見られ、家族は前を向いて座っている。家族成員間の相互作用、および感情交流を意味するものはあまり感じられないといえる。D子の家族柔軟性欠如得点の高さは、母親の過度なしつけが影響しているよう。

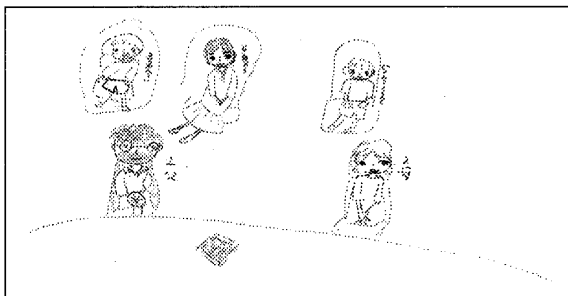


図4 D子のKFD 描画順 ①父 ②母 ③弟 ④自分 ⑤弟

表5-1 D子のFAIとCDI得点の平均

FAI		CDI	
家族内評価 凝集性	家族組織の 柔軟性欠如	抑うつ中核	自己否定
2.69	++2.43	+.86	.70

P<.05

表5-2 親のFAIの各次元の平均と標準偏差(SD)

	家族評価・ 凝集性	家族組織 の柔軟性	家族内 ルール
父親	+3.36	--1.00	3.00
母親	3.00	-	2.75

P<.05

事例5

E子は母親と二人家族である。母親の自由記述は、「父親とは、現在別居中で、調査に協力できません。来学期には、転校して新しい環境で一からスタートです」であった。E子のCDI得点は平均以上であり、抑うつ感が高い(表6-1)。

総合的分析

KFD(図5)のなかで、E子は背面をむいてテレビを見ているところ、母親は台所で料理を作っているところが描かれている。家族内交流は乏しく、距離の遠さは、ふたりの心理的距離が近くないことを物語っているようである。また、区分化も見られ、E子の母親に対する陰性感情を反映しているよう。母親のFAI家族評価、凝集性得点が高いことより、母親の一人よがりな家族評価が、E子の抑うつ感情を高めているのかもしれない(表6-2)。

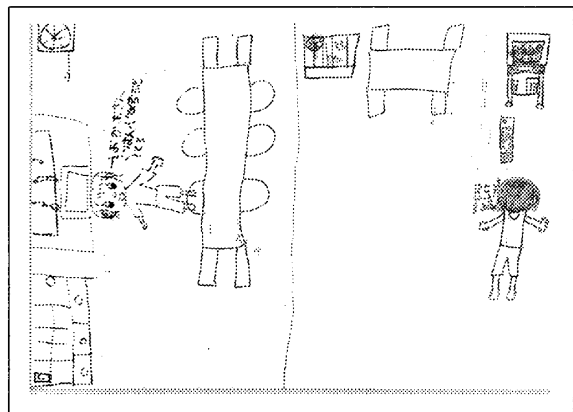


図5 E子のKFD 描画順 ①母 ②自分

表6-1 E子のFAIとCDI得点の平均

FAI		CDI	
家族内評価 凝集性	家族組織の 柔軟性欠如	抑うつ中核	自己否定
-	+2.29	++1.57	++1.80

P<.05

表6-2 親のFAIの各次元の平均と標準偏差(SD)

	家族評価・ 凝集性	家族組織 の柔軟性	家族内 ルール
母親	+3.33	-	2.75

P<.05

## 考 察

個別的な分析において、事例として挙げた家族は、適応家族と呼ばれるものからは外れたところに位置すると考えられる。すなわち、家族成員間で、家族雰囲気への捉え方にずれを感じさせるものであったといえる。

### 1) 質問紙調査と個別的な分析の検討

質問紙調査において、親の家族評価と児童の家族評価との関連について指摘したが、個別的な分析からも両者の関連が示唆された。すなわち、親の家族評価が平均以上では、児童の家族評価も平均以上であり、抑うつ感も低いことが示された。しかし、親だけが家族評価が高い場合は、むしろ児童の家族評価は低く、抑うつ感も高いことがわかった。これは、西出・夏野(1997)のいう、親が一人よがりに家族を肯定的に評価している場合、かえって子どもの抑うつ感を増加させると述べていることから理解できよう。

また、家族間コミュニケーションが欠如していたり、家族内ルールが強いと感じている親では、児童の抑うつ状態をもたらしやすいと考えられる。すなわち、家庭におけるしつけの厳しさは、児童の自信や自己肯定感を損ねる恐れがあり、家庭で必要以上に役割を求められることは、疲労感や倦怠感などの身体的症状が生じると考えられよう。

家族雰囲気の評価に関して、親が児童の立場に立って、家族雰囲気を見つめなおす必要性がある。

### 2) 児童のFAIとKFDの検討

今回、FAI家族組織の柔軟性欠如得点が高い児童のKFDでは、家族が各々個別の行動をしている姿が多く描かれた。家庭内のしつけが厳しい場合、家族成員間の交流は乏しく、家庭内は常に緊張状態が存在すると考えられよう。児

童の家族評価・凝集性得点が高い児童の描画スタイルに多く見られた特徴は、区分化、包囲であった。加藤(2000)は、区分化については、一本以上の直線で人物が意図的に分離されることは、感情の否認や家族成員からの拒絶や孤立、コミュニケーションの困難さを表すと指摘している。家族評価が低い児童のKFDでは、内在化された家族に対する不安や葛藤などネガティブな感情が表出されるといえる。

今回の調査では、家族成員間の得点のずれを積極的に解釈に生かすことを試みた。これは、西出(1993)の指摘する家族成員間得点には、家族の問題意識に対する重要な情報を与えるという見解を支持する者たちとなった。

最終的な目標である教育現場への適用という点に関しては、事例数が少ないため、結果をそのまま一般化することはむずかしい。今後さらに事例を増やし、その信頼性を高める必要がある。しかし、KFDという投影法的方法を用いることで、児童の抑うつ傾向における家庭環境要因の理解が可能となったといえる。

### 引用文献

- 日比裕康 1986 動的家族描画法(K-F-D)  
—家族描画による人格理解— ナカニシヤ出版
- 加藤孝正・伊倉日出一・久保義和 1975 動的家族描画法のスタイルに関する研究  
日本芸術療法学会7, 63-71.
- 加藤孝正 1988 特集 描画テストの読み方 動的家族画(KFD), 臨床描画研究1, 87-103.
- 加藤孝正 2000 学校画・家族画ハンドブック. 金剛出版
- 北本桜香・宮本邦雄 2003 児童の抑うつと家族雰囲気について—親の内的作業モデルとの関連  
東海女子大学紀要, 23,139-148.
- 西出隆紀 1993 家族アセスメントインベントリーの作成—家族システム機能の測定—. 家族心理学研究, 7,1,53-65.
- 西出隆紀・夏野良司 1997 家族システムの機能の認知は子どもの抑うつ感にどのような認知を与えるか. 教育心理学研究, 45,456-463.
- 植村徳治 1989 小学校における動的家族描画法(K-F-D)の実際, 臨床描画研究IV, 181-199.